

# 東南アジア学会第 98 回研究大会プログラム

2 日目 12 月 3 日 (日)

8:40 受付開始 [3 号館 1 階]

9:20 共通シンポジウム [3-301 教室]

「基礎教養の対象としての東南アジア」

総合司会：青山亨（東京外国語大学）

9:20-9:50 趣旨説明 桃木至朗（大阪大学）

9:50-10:40 報告 1（高校側から）

「中学・高校の教育の中での東南アジア～世界史 B を中心に～」

福本淳（神奈川・栄光学園）

10:40-11:30 報告 2（大学 1-外国語・国際系）

「上智大学における東南アジア教育—総合グローバル学部（FGS）の取り組みを中心に」

根本敬（上智大学）

11:30-12:20 報告 3（大学 2-総合大学の人文・社会系）

「大阪大学の東南アジア教育」

菅原由美（大阪大学）・池田一人（大阪大学）

12:20-13:40 昼食休憩

13:40-14:00 コメント 1（高校側から）

穴井友知（大阪・北野高校）

14:00-14:20 コメント 2（大学側から）

上田信（立教大学）

14:20-16:00 総合討論

16:00 閉会の辞 飯島明子（学会会長、東洋文庫）

東南アジア学会第 98 回研究大会シンポジウム(2017 年 12 月 3 日・神田外語大)

## 「基礎教養の対象としての東南アジア——高大接続から考える」

### 趣旨説明

桃木至朗(大阪大学)

本シンポでは、本学会のこれまでの取り組みと、現在の高校・大学改革や入試改革の方向性を踏まえながら、広い意味の高大接続を考える（大学院教育も念頭に置くが、狭義の専門研究／研究者養成の部分は取り上げない）。今回の中心的な課題は、「東南アジアはよくわからないし自分に深い関係もないので敬遠してほとんど学ぼうとしない、したがって東南アジアを理解すべき状況に置かれてもどうしていいかわからず低次元の理解にとどまる」という状態にある一般の大人たち（高校教員や他分野の研究者を含む）や、その予備軍である学生たちを、どうやって「東南アジアもある程度理解しており、必要になったら一定水準の理解が出来るような調べ方・学び方を身につけている」状態にもっていくかである。付随して、東南アジア言語を専攻する外国語学部の学生に専攻語・地域以外の東南アジア全体をどう学ばせるかという課題も考えたい。したがって本シンポでは、狭義の専門教育よりも教養教育・教員養成教育などを重視する。高校側では地理歴史などの各教科・科目や課題研究、大学側では学生の所属分野（外国語系、人文・社会系、グローバル系など）ごとの教育などを取り上げる。教育内容・方法だけでなくそれを実現する科目・専攻等の編成も念頭に置きながら、現状と今後の課題や改善策について議論したい。

2020 年代に高校教育や大学入試まで及ぶ、アクティブラーニングを軸にした中等教育再編の方向性（2016 年に出た高大接続システム改革会議最終報告、中教審答申等をそれぞれの HP で参照していただきたい）などから考えて、中学・高校での「暗記事項」は大幅に減る。したがって高校教科書の「東南アジア関連記述を増やそう／守ろう」という取り組みはほぼ無意味であり、代わりに「基本の考え方・調べ方を身につけさせる」ことが大事である。ただし大学レベルでは、必要とする学生・研究者が副専攻レベルでパッケージ化された「知識」にふれることが可能な仕組みを作っておくこと（それは日本人専用でよいともいえない）も不可欠な検討課題であろう。

以上の目的のために、本シンポでは高校の教科教育、大学のグローバル系および外国語学部をもつ総合大学の全学向け教育についての計 3 本の報告、それに高校の課題研究、大学の隣接地域の教育などの立場からのコメントをそれぞれ依頼した。シンポの形態としては、「短い報告をたくさん並べる→討論は時間切れで消化不良」という事態を避けるべく「少数の長い報告とたっぷりの総合討論」によって議論を深めることを狙っている。

## 報告 1 要旨

### 中学・高校の教育の中での東南アジア—世界史 B を中心に—

福本 淳 (栄光学園)

私は、中高一貫の私立校の現役の教員として、中学の社会科や高校の地歴の現場における東南アジアの扱いについて報告します。

第 1 に、私の勤務校における中学地理や高校世界史 B の位置づけ、時間（単位）数について報告します。ただ、数年後には学習指導要領の改定も控えているので、現行のカリキュラムも役目を終える日が遠くなく、したがって、この部分は簡潔な報告にとどめます。

第 2 に、近年の世界史 B の教科書や大学入試問題における東南アジアの占める位置について報告します。詳しくは 12 月 3 日に譲りますが、東南アジアの扱いは質量ともに日増しに重くなる傾向にあります。

第 3 に、私が専門とする世界史 B の教育の中で、東南アジアのことをより深く教えるために、どのような工夫をしているか、拙い内容ではありますが私なりの工夫や考えを紹介したいと思います。

第 4 に、現場の高校教員として、東南アジア研究の専門家の皆さんに教えを請いたい部分などを数点、あげたいと思います。東南アジアは、中国やヨーロッパに比べてまとまった文献・史料が少ないのか、教科書や啓蒙書の記述も、どこか曖昧なところがあり（シュリーヴィジャヤなど）、多くの高校教師にとって悩ましいところでもあります。

第 5 に、私の本来の専門ではありませんが、何回か担当したこともある中学地理のなかでの、東南アジア地誌の扱われ方を報告したいと思います。

浅学非才の身ではありますが、充実した時間が過ごせればと思っております。当日はよろしくお願ひします。

## 上智大学における東南アジア教育 —総合グローバル学部 (FGS) の取り組みを中心に—

根本 敬 (上智大学総合グローバル学部)

上智大学総合グローバル学部 (Faculty of Global Studies, FGS) は、外国語学部の旧アジア文化副専攻と国際関係論副専攻の両方が分離して 2014 年 4 月に設立されたものである。地域研究系 (アジア、中東・アフリカの 2 領域) と 国際関係論系 (国政政治、市民社会・国際協力論の 2 領域) の 2 つの研究系で構成され、両方を学生に学ばせることによってグローバル・スタディーズに取り組みさせている。3 年次以降はいずれかの研究系をメジャーとして選択させ、卒業論文を執筆させることを義務付けている。

本報告ではまず、FGS 地域研究系のなかの東南アジア研究に関連する全ての科目の名称、レベル、履修対象学年等を概観したうえで、FGS が担当する全学教育科目 (いわゆる一般教養科目) のひとつである「東南アジア史入門 I」(2 単位、半期科目、全学部から受講可) に注目し、その特徴を論じる。この科目が上智における「基礎教養の対象としての東南アジア」を正面から扱っている数少ない科目だからである。

「東南アジア史入門 I」では、出身背景が多様な上智の学生に留意し、受講生が「歴史に特別の興味なし」「世界史は十分に習っていない」「東南アジアについての基礎知識はゼロ」ということを前提に、「地誌情報の徹底」「毎回 one テーマ限定 (年表風解説講義は避ける)」「プリントを配付しパワーポイントは使わない」「日本との関係史 (特にアジア・太平洋戦争) 重視」の姿勢を貫いている。授業への反応と期末テストの答案の特徴にあらわれた学生たちの東南アジアに関する知識や教養の不十分さと、一方で習うことによって新鮮さを覚える学生が一定数いることについて紹介する。

検討課題として、教員相互の科目間連絡が皆無に等しいこと、学生たちに与えられた科目選択の幅が多様すぎて系統的に「東南アジア教育」がおこなえていないこと、入試問題作成への対応が不十分であること (「世界史」における悪問奇問の追放や「考えさせる問い」の出題がなされていない)、AO 入試化が進むなかで高大連携が不十分なことを指摘する。

本報告を通じ、高校側で今後いっそう取り組まれることになる **active learning** を通じて、「(自分で) 調べ、考え、発言する能力」に優れた学生たちが大学に入学するようになる一方、従来の世界史や地理に関する基礎知識がますます不十分になりかねないなか、「基礎教養としての東南アジア教育」はどうあるべきか、共に考える材料を提供したい。

### 第3 報告要旨

## 阪大における東南アジア教育 –リソースと可能性–

菅原由美、池田一人（大阪大学・言語文化研究科）

大阪大学では、東南アジア研究者または東南アジアに関わる研究者が現在様々な部署に散らばって所属している。基礎教育系科目である全学共通教育科目では、主に国際教養科目の中に東南アジアに関わる授業がいくつか提供されているが、これは各授業間に共通目的がなく、バラバラに開講されているだけである。専門教育科目としては、主に、外国語学部、文学部、人間科学部で東南アジアに関連する授業が開講されている。これら専門科目の授業は、外国語学部の外国語実習を除き、全学部開放されており、他学部学生でも授業の履修は可能であるが、学生の多くは自分の専門の授業を取ることを考えているため、他学部の授業を取りにくる学生は多くない。そのため、プログラムとして提示することによって、学生に他学部の授業を積極的にとってもらうように促す試みが誕生した。

横断型教育プログラムとして、2つのタイプがあり、1つは「知のジムナスティックス（高度教養プログラム）」で、専門教育以外に必要なとされる知識や能力を与えるために、イシューベースで提供される他学部の授業を自由選択型で履修するもの、もう1つはマルチリンガル・エキスパート養成プログラム(MLE)で、外国語学部と他の文系学部の学生が相互に授業をとるもので、選抜された学生に、一定単位を取得後、修了証を出すプログラムである。特に、文学部は「グローバル・アジア・スタディズ科目」というアジアを対象として、思想・歴史・文学・芸術などの人文学の基礎知識、理論、方法論を学び、幅広い人文学的教養と高い専門性を備えたグローバル人材を育成する科目群を、歴史系科目を中心に用意しており、これが MLE 用に使われている。

外国語学部東南アジア5専攻（インドネシア、タイ、ビルマ、フィリピン、ベトナム）は、今年度より、5専攻共通授業を整備し、学生たちに、東南アジアの文化、歴史、社会、宗教、言語に関する基礎知識を持たせる授業群を用意し、各国個別の事情に埋没する学生たちに視野を広げさせる試みを始めたが、これらの授業はまだ他学部の学生用には検討されていない。プログラムの技術的問題点以外に、他学部の授業を履修することを積極的に支持しない教員もいるため、今後、学生と教員の両方の意識改革が必要であると思われる。